グリーンサイエンス21便り(22)

サウジアラビア出張所感

下村　政裕（しもむら・まさひろ＝元さいたま市水道局
現フジテコム(株)研修担当顧問）

行くことがある、というよりは、行ってみたいとは全く思ってなかった国。サウジアラビア王国。世界最大級の石油輸出国。2019年まで、外国人の観光目的での入国は許されず、女性に対する差別的な扱いも報道されてきた。渡航当日まで、できれば行きたくないとの気持ちでいっぱいだった。

砂漠の中に構築された首都リヤド。100％海水淡水化の水道。緑はかなり整備されている。その緑を支えるのも、海水淡水化の水。木々、一本一本に給水口があり、芝生には、たくさんのスプリンクラー。そうやって、巨大な公園から各民家の植木まで、緑を育ませている。

日中の気温は50℃を超える超猛暑。日中におそらく70～80℃以上まで太陽光により熱せられたコンクリート、アスファルトジャングルが、その高温を夜中まで保ち続ける大都会。そこにオアシス的存在として、人口の緑の公園があちこちにある。その中に入ると、そこは別世界。冷っとした空気が漂う。それに誘われて、夕暮れ時から多くの人々が集まる。家族の団欒、友人たちとの集い。夜半まで続く。早朝に散歩に出ると、あちこちの公園は、ゴミだらけ・・・・（写真右）。砂漠の砂嵐的な風にあおられ、町中に飛び散っている。これほどではないにしろ、東京もそんな時代があったなと思い出す。そして、車は消耗品。日本ではかなりの高級車にランクされる車でさえ傷だらけ。さすがオイルマネーの国と妙な納得。

だが、ここにもいた！水道愛を持った人たちが！　浄水場で、処理がうまくいってるか否かを、処理過程の水を口に含んで確認する日本やラオスの水道人と同様の人たちが、ここにもいた！　水道管路の維持管理業務のため、進んで、マンホールの中に入り、水圧や流量を確認するマネージャークラスの水道人(写真左)。蛇口に適正な水を配りたいという思いが、ピリピリと伝わって来る。命の水を確実に届けることを使命とし、水道を愛し、その命の水で生活をする人々を愛し、24時間、労苦を全く惜しまない・・・・。

国境を超え、文化を超え、宗教を超えて、触れあい、お互いに尊重しあうことができたと感じる。水道の仕事を長く続けてきて良かった。第二第三の人生も、水道の仕事を選んでよかった。サウジアラビアのそうした人たちと交流が持てた大きな喜び、胸を痛いほど打つ感動をも頂いた。こうした人たちがいる限り、日本同様、環境保全に対する考え方も必ず変わっていくと確信。またそこに戻りたい！そこの仲間に会いたい！　と心から思う今回のプロジェクトの最終渡航からの帰国後である。